

第1回文化講座 ご報告

～学校発着! 怪談・奇談・妖怪まち歩き～

12月6日 文句なしの快晴。

コートを着ていると少し汗ばむぐらいの気温の中、まち歩きがスタートしました。

お天気まで味方をしてくれたと確信。

コロナの感染者が日々増していく状況の中、本当に開催して良いのか、悩み続けた日々。でも、参加者の皆様からお答えを頂くことができました。誰一人キャンセルがなく参加者の皆様とお会い出来たこと、それが答えだと思っています。心の底から感謝申し上げます。

私の考える文化講座の意義とは、父母同士の繋がりの輪が広がり笑顔が溢れ、楽しみを共有出来る場であること。それが父母懇活動にも繋がっていくと思っています。

これからもそんな企画をしていきますので、どうぞ宜しくお願い致します。

ケ・セラ・セラ 学芸部長 三輪夕子

【参加者の感想】

- 東海高校の周辺にこんなにたくさんの妖怪スポットがあった事に驚きました。また、他の街歩きも参加してみたいと思います。皆さまと楽しい時間を過ごせて感謝しております。(高2母)
- 怪異現象は良い結果になれば信仰の対象、悪いことになれば妖怪の仕業となるとのお話にとっても納得しました。(高2母)
- とても楽しい時間でした。帰ってからも島田先生と撮らせていただいた写真を見せながら、楽しく会話ができました。(中1母)
- とても知識が豊富で説明も聞きやすかったです。

自分の学生の頃に島田先生のような先生にお会いしていたら、もう少し勉強に興味を持ち、今の自分とは違った人生を歩んでいたかと思いました(笑)(中2母)

- お友達にお誘いいただき、父 母懇の文化講座に初めて参加させていただきました。コロナ禍で学校に行く機会もなかなかない中、東海界限でのまち歩きはとても楽しかったです。普段何気なく通っている場所にもそれぞれの歴史があるんだなど大変勉強になりました。こんな時期なので、近くでふとした気付きを見つけることも素敵だなと改めて思いました。(高2母)



さて、今号は「文化講座特集」と題し、残念ながら参加できなかった方にもまち歩きを楽しんでいただきたいと思い、講師の島田先生に改めて解説を書きました。簡単な地図も掲載いたしますので、いつかこの解説とともにまち歩きをお楽しみください。

島田尚幸先生による

「東海周辺まち歩き」解説

文化講座を担当させていただきました、中学で理科（今年度は中1地学、中2化学、中3生物）を担当しております、島田尚幸と申します。

今回、事務局の方々が「疫禍が広がりを見せる中でも、何か文化講座としてできることはないか」と考えられた中で、縁あってまち歩きの講師としてお声かけ頂きました。非常にありがたいことだと感じています。



養寿院での解説の様子

自分は、学校での活動以外に、「あいち妖怪保存会」という、如何にもアヤシゲな名前の団体で共同代表を務めています。その活動の一環として、妖怪や怪談・奇談に因るまち歩きを幾つか行っています。最初に頂いた依頼も、これまで実施してきたコースをもとに、まち歩きすることはできないか、というものでした。こちらの負担を最小限に、という温かな配慮の上での申し出でありました。ただ、既存のコースであれば、「大ナゴヤツアーズ」や「やっとかめ文化祭」など、自分の携わる企画に参加して頂いた方が良く考えています（自分以外のまち歩きや講座を知る機会にもなると思います）し、東海父母懇・文化講座として行うのであれば、学校周辺で巡ることはできないかなと思い、組み立てることにしました。

先生がガイドを務めていらっしゃる「大ナゴヤツアーズ」のサイトのリンクを貼っておきます。魅力的な講座がたくさんあります。「まち歩きに参加してみたい」という方は、こちらからでも可能です。
<https://dai-nagoyatours.jp/>

「学校周辺にそんな話あるの?」と思われた方もいらっしゃると思います。

怪異や妖怪は「自然の中で遭遇する」というイメージを持つ方は少なくありません。確かに、山姥だの海坊主だのは海山に現れる訳ですし、街中で現われたら唯

のババアと坊主でしかありません。しかし、怪異も妖怪も、基本的には自然に限らず「人の想像力の及ぶ場所」であれば、どこにでも湧きます。とりわけ、学校周辺は寺社仏閣の多い、歴史の残る街です。過去から現在に至るまで、様々な人の営みが紡がれた土地であり、多様な話が残っています。そのような中から怪談や奇談をピックアップして、行程を考えるのはとても楽しいものでした。



自分が「まち歩き」を計画するときは、毎回テーマを設けています。

今回は父母懇の企画であるため、「学校のある地域を知ってもらう」ことを念頭におきました。我々教員は、子供の学びを支え、育ちを援けるのが仕事です。しかし、その役を担うのは、教員あるいは保護者だけではありません。「地域」に育てられるという側面も、存在しているのです。私立学校は公立学校のように「学区」がある訳ではありません。そのため、地域との結びつきは一見すると薄いようにも感じられます。しかし、子供たちにとっては、自宅周辺も学校周辺も、いずれも「当たり前」にある「特別」な場所です。だからこそ、改めて、子供たちの通う地域に目を向けるきっかけが生まれれば、と思いました。

そして、もう一つのテーマが「視点を変えてみる」。

我々は、主たる部分にばかり目が行きがちです。今回のまち歩きでは、敢えて路地裏や地元商店街を歩く行程を意識的に挿れました。一步踏み込み、一本奥

に入ると、見える世界は大きく変わります。今回歩いてみて、思った以上に祠や石柱があることに気付かれた方もいらっしゃいました。日頃当たり前と思っている日常も、見方を変えることで違った顔を見せます。新鮮な驚きや喜びは、決して学生だけの特権ではありません。

「視点を変えてみる」というのは、物や場所だけでなく「人」に対しても効果があります。まち歩きを通じて、



正門の通り沿いにある祠です。どこにあるでしょうか?

共に歩いた人たち 同志の間でも、新たな気付きや発見が生まれるような場が生まれればという思いも、テーマ設定する中に入っていました。

ただ、今回残念ながらご参加いただくことが叶わなかった方もいらっしゃるという話を聞いております。興味、関心をもっていただけたことを嬉しく思っています。

どのように巡ったのか知りたいという方もいるかもしれません。また、参加いただいた方にとって、振り返りきっかけにもなれば、とも思いますので、以下にまち歩きで通ったルートを些か簡単ではありますが紹介いたします。

怪しい世界の入り口は、案外身近なところにあるのです。



<① 学校発>

出発から、すぐに解説をはじめました。

学校は建中寺から見ると北東の方向、鬼門に当たります。そのため、正門を出た辺りがかつては「鬼門筋」と呼んでいたようです。ここでは鬼門を入りに、(昨今も話題となっている)「鬼」について話をしました。

<② 養寿院>

学校を北に歩くと、養寿院という寺院があります。

山門には天狗が手に持つ「羽団扇」が一對彫られています。この寺は、秋葉権現を祀っています。秋葉権現は天狗・烏天狗の姿で描かれることが少なくありません。ここでは、信仰対象としての「天狗」の話に触れました。



<③ 須佐之男社>



学校の周りには、スサノオノミコトを祀る祠が幾つかあります。スサノオはアマテラスの弟として記紀神話に登場します(ヤマタノオロチ退治でも有名ですね)。スサノオと切っても切れないのが「河童」です。河童の伝承は祇園信仰(スサノオ信仰)に結びつくものが少なくありません(この地域でも祇園祭の日に水辺に入ると尻子玉を抜かれる、などの話も広く伝わります)。河童はなぜキュウリが好きなのか、から愛知の河童譚のあれこれを話しました。

<④ 山口町>

かつて、この地に米倉利助という人が住んでいました。彼の屋敷に奉公していた一人の下女が、屋根材として使っていた萱を焼べていた時のことです。突如、猛烈な悪臭が漂いました。よく見ると、20センチメートルほどの百足が半身焼かれているのに気付きました。下女は気にせず、その百足を燃え盛る炎の中に入れました。次の日も、全く同じことが起きました。百足も前日に見たものと寸分の違いもありません。それでも下女は気にせず、窯に百足を放り込みました。

その、翌日のことです。下女が身支度をしようと鏡の蓋を外したところ、焼き殺したはずの百足が鏡面を這っているのに気付きました。思わず声を上げて叫んだため、家にいた者たちが一斉に集まりました。襖を開けると、部屋には大小様々な百足が這い歩くという不気味な光景が広がっています。下女は、正気を失っていました。すぐさま下宿先に戻し、修験者を呼んで来て加持祈禱が行われました。修験者曰く、「大体は取れた。全部ついたままであれば、命すら危うかった。」とのことでした。



赤塚交差点

<⑤ 赤塚～善光寺街道>

善光寺街道沿いの古い街並みを歩きました。

外敵の侵入を防ぐために設けられた街道の構造(枅形機構)や、古い商店、町屋、石柱などを眺めました。「白壁」など土地の歴史と結びつく町名の話から、武家屋敷に残る因縁譚(井戸に現れる幽霊)などに話が及びました。



まちに溶け込む
薬碑の石柱

<⑥ 養念寺>

かつて、養念寺の北向かいに古道具の店があった時のことです。



手入れの行き届いた美しい竈が売られることになりました。品もよく、安価であったので、すぐに売れてしまいました。ところが、3日ほど経つと、その竈は返品されてきました。

物は良いので、売りに出すとすぐに売れます。しかし、数日経つと、返品されて戻ってくる。こうしたことが4、5回続きました。店の主人も不思議に思い、返品に來た際に話を聞いてみることにしました。客は、最初は渋りなかなか話そうとはしませんでした。しかし、やがて、こんなことを話しました。購入した晩から、夜半になると



80歳くらいの老婆が現れて、竈を撫で回す。そうこうするうちに、老婆の姿は消えてしまう。そんなことが毎晩続くのだそうです。

主人は、竈を打ち砕くことにしました。すると、中には箱のようなものがあり、3両もの大金が出てきました。主人はその金を使って、懇ろに老婆の菩提を弔ったそうです。

<⑦ 筒井商店街>

商店街を歩きました。寺社が多いこともあってか和菓子屋さんや何軒かあります。昔からある喫茶店やうど

ん屋と共に、新しいカフェやレストランも軒を連ねます。寂れるのではなく、新しい風が吹き込み、まさに人の暮らしの中で、暮らしと共に活きている商店街です。「今度行ってみよう」という声も聞こえてきました。

<⑧ 自然院>

「黒門町」の由来ともなっているのが、この寺院です。



かつて、この門前に林平という人が住んでいました。車道で草履を買った帰りのことです。見ず知らずの3人連れに突如肩を捕まれました。大きな羽音が聞こえたと思ったら、体が上空高く舞い上がっていたそうです。空の上から、御嶽山や白山、多度山と、名だたる霊峰を巡らされました。ただ、気がつくと、元いた場所に戻ってきていたそうです。

「あれはきっと、天狗の仕業に違いない」そう思い、恐れ慎むようになった、とのこと。



境内には幼稚園もあり、
素敵なお庭です

ここでは、「得体の知れない現象」をどのように理解、解釈するかという“落とし所としての怪異・妖怪”や、天狗と「山岳信仰」との結びつきを話しました。

<⑨ 情妙寺>

門前で火災が起きた時のことです。

火の手が広がる中、東の方から老人1名が西に向かって進みながら、「この門焼くな」と声高に叫び、周りの人の知るところとなりました。東の方から数十もの人が「この門が焼けたならば無念である」と押しかけ、火の手を防ぎ止めました。

無事延焼を免れたので、その人たちにお礼を伝えようとしたところ、いたはずの老人も、数十の人たちも姿を消していました。「あれはきっと(情





ピンマイクとスピーカーで、マスク越しでも聞こえます!

妙寺で祀られている) 鬼子母神の利益であったのだろう」という話になりました。

霊験譚の中にも「奇談」と呼ばれるものは幾つかあります。不可思議な現象が伝わる中で、信仰を獲得することもあります。ここでは「アマビエ 2020」の話題にも触れました。

<学校着>

学校に戻り、コースの振り返りとまとめを行い、無事解散となりました。

島田先生の特集はTFLetter No. 2に掲載しています。ぜひ併せてご覧ください。

TFLetter では今後も個性豊かな東海の先生方を特集していく予定です。

編集後記

先生の解説をいただき、実際にまち歩きに出かけました。まちに溶け込んだ歴史や人の営みを再発掘するようでワクワクしました。うーん、お話を生で聴きたかった!